2025
（令和７）年
8月号

http://www.betsuin.jp/
別院ホームページ

響け念仏　北の大地に

本願寺帯広別院だより

〒080-0803 帯広市東３条南５丁目３　TEL：0155（23）3720
FAX：0155（21）4989　発行人：輪番・石川勝紀

別院公式 LINE

浜大樹のトーチカ。
詳しくは５頁の写真説明を参照ください

特集 非戦平和 戦後80年 総集編

戦後80年の節目を迎え、本紙が令和２年から毎夏取り組んできた特集「非戦平和」を総集編としてお届けします。５年にわたる取材で聞かせていただいた戦争の悲しい体験は、いずれも重要な証言ばかりで、あらゆる世代が知るべきことです。

別院では、８月15日に、私たち人類が繰り返してきた戦争により犠牲となったすべての人をしのぶ全戦没者追悼法要を勤修します。９月１日～30日は本堂にて「非戦平和パネル展」を開催し、９月18日には鐘楼堂にて「平和の鐘」をつきます。10月23日は、帯広別院・十勝組合同による「戦後八〇年戦争犠牲者追悼法要　～非戦・平和を願うつどい～」を行います。過ちを繰り返さないよう過去に学び、現在、武力により苦しんでいる人々に思いを寄せ、誰もが心豊かに生きることのできる未来社会の実現を目指します。

８月のご案内

盆　踊　り　　３日(日)14時～20時頃〈境内〉
盂蘭盆会法要・全戦没者追悼法要・浄華堂追悼法要
　　15日(金)13時〈本堂・浄華堂〉
宗祖月忌法要　　16日(土)13時〈本堂〉

９月のご案内

平和の鐘　　18日(木)13時20分〈鐘楼堂〉
秋季彼岸会法要　　20日(土)～23日(火)13時〈本堂〉
　　布教使　北海道教区根室組正光寺　鈴木將弘 師
公開講座　　27日(土)13時半開場　14時開演〈本堂〉
　　落語「鏡の中の親鸞～歎異抄より～」　桂　春蝶 さん

令和６年能登半島地震により
被災された皆さまに
衷心よりお見舞い申しあげます

※ 9月１日～30日　本堂にて「非戦平和パネル展」を開催します

2020（令和2）年8月号掲載

特集

戦後75年本願寺帯広別院

「非戦平和」鼎談

75年前の昭和20（1945）年7月14日早朝、警戒警報、そして空襲警報のサイレンの音が帯広の町に鳴り響きました。2日にわたる米軍の空襲による被害は『帯広市史』（平成15年編）によると「死者五名、馬一頭、被災家屋五十九戸」とあります。しかし実際にはさらに大きな被害がありました。この度は「非戦平和」の願いから、全戦没者追悼法要（8月15日）を前に、別院門信徒の近藤繁さん、髙田愛子さん、小室和子さんに当時の様子を語っていただきました。司会進行は十勝組組長の岩﨑教之さんにお願いしました。

司会者　十勝組組長　岩﨑教之さん

参加者　壮年会元会長　近藤　繁さん
婦人会会員　髙田愛子さん
門　徒　小室和子さん

「こんな悲惨な思いを二度と繰り返してはならない」と次世代へ伝える

司会　岩﨑さん　私は昭和33年、戦後生まれです。父は、大正9年生まれでシベリアに抑留され、昭和24年に帰ってきましたが、戦争については語ってくれませんでした。それほどに厳しかったのだと思います。

75年前、それぞれがどういうお立場で、どんな経験をされたのか、お聞かせ願います。まずは近藤さま。

近藤さん　言葉で言い表せない悲惨な状況でした。まさしく一瞬先は闇の時代です。

近藤さん

髙田さん

私は当時の啓北（けいほく）小学校（今の帯広警察署）を兵舎としていた地域防衛隊の任務についていました。今では考えられない非人道的な訓練でした。50キロの爆薬を背負い、深さ1メートルの穴（タコつぼ）を掘り、浜大樹に上陸する敵戦車を水際でくいとめる作戦を想定し、体当たりする訓練を受けていました。その時点で我々は人間扱いされていませんでした。

その日、札内（さつない）川で訓練していた私たちは、40数機の米軍機が十勝上空を北に向かうのを目撃して危険を察し、啓北小の防空壕（ごう）へ走りました。あと5分で着くところを、帯広神社へ避難。啓北小に帰ると、入るはずだった防空壕付近には50キロ爆弾3発が着弾し、幅20メートル深さ10メートルの穴が空いていました。1人残っていた当番兵は即死。私たち29名は、わずか5分帰りが遅れたために助かったのです。付近では、爆弾で家族みな即死のところもありました。

わずか５分の差で助かった命

今でも鮮明に思い出します。忘れることはできません。こんな悲惨な思いを二度と繰り返してはならない。

普段お寺で聞かされた「生死一如」。

門徒の一人として、学校、公民館で語り、次の世代へと継いでいきます。

司会　徴兵制についてはいかがでしたか。

近藤さん　徴兵制は20歳からです。私は予科練（14～19歳対象）に20年9月に入る予定でしたが、地域防衛隊に入ったのは20年7月、18歳でした。既に日本には戦闘機もなく、魚雷にスクリューを取り付けて操舵する訓練をするなど、相当追い詰められていたようです。1銭5厘のはがきで徴兵される。人間でなく消耗品です。

司会　次に、髙田さまお聞かせいただけますでしょうか。

髙田さん　昭和12年、女学校に入学してからは戦争一色でした。その後幼稚園教諭になった時、ラジオから流れてきた「戦争状態になった」という言葉が恐ろしい記憶として耳から離れません。

19年に小樽に引っ越し、7月ごろ米軍機から白いビラが大量にまかれたことがありました。すぐに回収され、後に聞かされましたが、降伏を促すもので、全国各地の空爆を予告する内容だったそうです。

戦後、夫が復員しても、食べることは大変でした。実家が農家だったので知り合いにお米を分けようとしましたが、警察に供出させられました。

何よりも、大切な子どもをお国のために旗を振って送り出さなければならない親の気持ちは言い表すことができません。今も軍歌を聴くと胸が締めつけられます。

若いときは全部戦争でした

鼎談会場となった別院本堂。コロナ対策のためマスク着用、十分な間隔、換気をしながら進めた

司会・岩﨑さん

小室さん

北海道空襲について

1945（昭和20）年7月14、15両日、道南部沖に空母14隻からなる米軍第38任務部隊が展開。空母から飛び立った艦載機が、道内各地50か所以上で機銃掃射や爆弾投下による攻撃を行い、特に軍需施設のあった室蘭、根室、釧路が大きな被害を受けた。また、海上でも函館沖や津軽海峡を航行していた青函連絡船などが沈められた。北海道空襲の犠牲者は少なくとも2,916人とされる。
（朝日新聞デジタル2015.7.14より一部抜粋）

昭和20年7月15日朝、無差別爆撃を受ける本別市街地。50分もの攻撃を受け、街は三日三晩燃え続けたという
（写真：『帯広・十勝の一〇〇年』郷土出版社より）

戦争は惨めで残酷なもの。この気持ちは、若い方にはなかなか受け留めてもらえないかもしれません。でも今は、皆さまのおかげでこの年まで生かされたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

司会　青春時代はすべて戦争の状況だったことなどをお聞かせいただきました。次に小室さまお願いします。

小室　私は空襲当時女学校1年生で、大通1丁目のちょうど爆弾が落ちたあたりに住んでいました。家の建物は何とか残りましたが、ご近所は大変でした。

ある時、白布に包まれたお骨を抱えた兵隊さんが歩いて来られ、国防婦人会の人がお迎えしていました。あとで、その遺骨は啓北高等小学校の先生だったと聞きました。そういう風景は何回も見ました。

いよいよ兄が出征することになり、みんな旗を振って送るんですけれど、

帯広空襲の碑（帯広市西１条北１丁目付近）

兄の出征を母は駅まで送れなかった

母は駅まで送れなくて、それでも気丈に玄関で「お国のために頑張って」と申しましたら、兄は敬礼をしていました。その後母が部屋に戻ったときに、声を上げて泣いていたのを今でも思い出します。

7月14日には米軍の偵察機が飛んでいるのを見ました。翌15日は朝から警戒警報が鳴り響き、母と弟と妹、また後から来たご近所の方と一緒に防空壕に避難しました。その間、グラマン戦闘機の爆音、機銃の音も聞こえました。その空襲で、女学校の先輩も機銃が当たって亡くなっています。戦争はとても恐ろしくて、食べることも大変。夜は体が震えて眠れなかったです。戦後、広島、長崎、そして沖縄のことを思うと涙が流れます。今は、静かに暮らすことができ、感謝しております。

司会　まとめ　戦争を体験された方がご高齢になり、元気な方も少なくなってきました。人間のもつ愚かさの最たるものが、人と人が殺し合う戦争であることを認識し直さなければなりません。

お釈迦さまは『仏説無量寿経（ぶっせつむりょうじゅきょう）』というお経の中で「兵戈無用（ひょうがむよう）」といい、兵士も武器を持ち得ない世にしていかなければならないと説かれました。

みなさまの悲しい体験談は、戦争を知らない我々が後世に伝え、平和のために役立てていかなければなりません。本日はありがとうございました。

昭和20年7月15日午前、軽空母ベローウッドの攻撃機８機により空襲を受ける根室
（写真提供：国立国会図書館デジタルコレクション）

2020（令和2）年9月号掲載

鼎談追記

近藤 繁さん（壮年会元会長）

当時、私は地域防衛隊に所属しており、軍の命令は「絶対」でした。18歳の少年が、一切の自由を許されない毎日を送っていたのです。帯広空襲では防空壕（ごう）が爆撃を受け、留守番をしていた隊員一人が即死。私の目の前で起きた惨事です。同級生の女の子は畑作業から家に逃げるところを機銃で攻撃され即死。なぜ18歳の若い命が奪われなければならなかったのでしょうか。空襲・戦争のことは、93歳になる今でも鮮明に思い出します。こんな悲惨なことを二度と繰り返してはならない。これを伝えることが、私の生かされている意味だと思います。

今も内外から、戦争をにおわせるニュースが尽きません。戦争に翻弄される人生、無念の死、残された者の痛みを忘れてはなりません。

悲しき戦跡

１頁写真および上写真：浜大樹の海岸に旧日本軍が設置したトーチカ。トーチカとは軍事的に重要な地点を守るためコンクリートなどで造った小型の防衛用陣地。大樹町には 15 基あり、施工には困難を極めたが、実戦に使用されることはなかった。町は戦争遺産として保存している

本別に米軍機からまかれたトルーマン大統領による声明文ビラ。「～～ドイツは壊滅せり～～貴国為政者ならびに軍部が戦争を継続する限り我が攻撃はいよいよその破壊力および行動を拡大強化し～～」等、無条件降伏を勧める文言が日本語、たて書きで記されている（写真：本別町歴史民俗資料館所蔵）

左）昭和 12 年頃の帯広国防婦人会。日中戦争が勃発したこの頃から、会では戦地に慰問品を送る活動が始められた

右）日中戦争で戦線拡張すると、農耕馬が強制的に徴用されるようになった。徴用令状がくると、農家は涙を飲んで戦場に送り出したという

（『帯広・十勝の一〇〇年』郷土出版社より）

浄土真宗本願寺派専用の保険

寺院災害保険

お見積りフォームにアクセスできます

浄土真宗本願寺派寺院専用に独自に開発され、ご寺院の実態に応じた保険料で自然災害を含む幅広いリスクを補償！

寺院活動行事保険

年間保険料　8,000 円

年間包括契約だから、行事の都度の人数報告や申し込み・入金手続きが不要!

あんしん収入補償保険

就業不能1日目から補償!
入院のみならず、医師の指示による自宅療養や通院なども補償!

浄土真宗本願寺派 傷害・医療保険

あんのん医療保険

団体割引 30%

（新・団体医療保険（医療保険基本特約・疾病保険特約セット団体総合保険）・傷害総合保険）

【加入対象者】浄土真宗本願寺派の住職・僧侶・寺族・門徒およびその家族

病気やケガによる入院や手術等を幅広く補償。（天災によるケガも対象）

◆1 日 5,000 円プランより ◆入院 1 日目より補償

★新規加入は満79歳まで、継続加入は満89歳まで拡大

介護・がん のリスクにも対応！！

介護特約　要介護２以上の認定、または保険会社所定の要介護状態が90 日を超え継続した場合に、一時金で 100～300 万円を補償

がん特約　がん診断一時金
がん通院治療費用にかかる特約もセット可能

フリーコール 0120-37-0243

＜取扱代理店＞
浄土真宗本願寺派提携代理店
株式会社 プラニ

【代理店所在地】〒600-8109　京都市下京区五条通西洞院西入平屋町 420RM ビル 3F
【受付時間】土・日・祝を除きます。午前9：00～午後5：00
https://www.purani-hongwanjihahoken.com

2021（令和3）年8月号掲載

特集 非戦平和の願いを聞く

近藤繁さん

戦跡は風化しても戦争の事実は消えない

初夏の陽気となった6月7日（月）。昨年の本紙8月号特集「非戦平和鼎談」で戦時体験をうかがった近藤繁さんにご案内いただき、十勝に残る第二次大戦の戦跡を訪ねました。

十勝川河川敷の茂みに眠る
戦車退避壕跡。左が近藤さん

76年前の昭和20年、18歳の近藤さんは地域防衛隊の任についていました。米軍の本土上陸にそなえ、浜大樹で50キロの爆薬とともに体当たりする「タコつぼ」特攻訓練を受けていました。浜大樹には今も、本紙※1ページに写真掲載したトーチカとよばれる戦争遺産が多数存在します。

今では人や車の往来も多く、また自然豊かな音更町鈴蘭公園付近の住宅街にほど近い十勝川河川敷の茂みの中に、戦車退避壕の跡がありました。大戦末期、米軍の上陸に備え、音更町には軽戦車等が多数配備されました。戦車を隠すために住民総出で掘ったのがこの壕です。

さらに、今は私有地となった然別森林内の土中三角兵舎跡を訪ね、また廃道の奥にひそむ弾薬庫跡を巡ると、ここで戦争が行われていたのだという事実を突きつけられました。

近藤さんは「戦跡は風化して消えますが、戦争の事実が消えることはありません。戦時中、お国のために、人の命は紙よりも軽んじられました。私たちは平和への誓いをしっかりと未来へつながなければなりません」と語気を強めて語られました。

茂古沼典子さん

父親の帰りを待ち続けた夫

典子さんの夫の茂古沼清さん（行年85歳、令和2年4月21日ご往生）は5歳だった昭和15年、大正村（現帯広市大正町）から旧満州チチハル市に移住しました。清さんの父太七郎さんは満州開拓公社で農業生産指導者をしていましたが、終戦を1週間後にひかえた20年8月9日に召集。離ればなれのまま、母照子さん、清さん、弟の賢二さんは引き揚げ、本家のある富山県に身を寄せ、その後、大正町へと戻られました。

茂小沼清さんの写真とともに
典子さん（左）、娘の土田恵美さん

照子さんは旧ソ連から引き揚げてきた人から、太七郎さんは亡くなったと聞かされました。しかしそれを信じられず、平成7年に亡くなるま

※2025年８月号（本号）では、１頁と５頁にトーチカの写真を掲載しました。ご参照ください

で夫の消息を追い求め、同じ隊に所属していた人たちとやりとりした手紙等が今も残っています。清さんは「母は父が帰ってくると信じて、ずっと待っていた」と話しておられたそうです。

清さんは晩年、厚生労働省の遺骨収集事業によりDNA鑑定をされましたが、該当する遺骨はありませんでした。清さんもまた、父の帰りを一生待ち続けていたのです。

典子さんはこう言われます。「終戦から70年以上が過ぎましたが、戦争により残された家族の心の傷が消えることは決してありません。夫や母のような思いをする人がなくなるよう、今後も非戦を願い、平和への思いを強くもち続けていきます」。

二度と戦争を繰り返さないために

中村（なかむら）みよしさん

私は大正12年1月、音更村生まれ。数えで99歳になりました。

帯広大谷高等女学校へ通っていた頃には戦時色が濃くなり授業どころでなくなりました。女学校では兵隊さんの下着や靴下などをミシンで作っていました。敗戦色が強まり、卒業後は近所の女の子たちと弁当持参で現在の丸美ヶ丘温泉あたりにあった大きな防空壕（ぼうくうごう）内で、軍服を直す日々でした。壕内は薄暗い電灯だけで、とてもいやな気持ちがしました。町内の回覧板で「音更川河原（現スーパーダイイチ近辺）に集まれ」とあると、竹槍（たけやり）を突く練習をさせられました。アメリカはどんどん攻めてきているのに、こんなことで本当に勝てるのかとも思いましたが、そんな弱音を吐こうものなら間違いなく親をはじめ大勢の大人に叱られるので、とても言えません。回覧板で出征（しゅっせい）の知らせがあると、皆で駅に見送りに行き、軍歌を歌って手を振りました。駒場の大きな軍馬牧場（現十勝牧場）から来た、日の丸を掲げた軍馬列車もよく見送りました。

昭和15年、家のすぐ隣の鈴蘭台に高射砲（こうしゃほう）防空部隊が配備されました。兵隊さんが内地に出兵するのでしょうか、夜になると靴底の鋲（びょう）の「ザックザック」と鳴る音が響き、とても怖かったです。鈴蘭台の側面には食料や武器、弾薬などを収める横穴がたくさんあり、恐ろしい銃剣（じゅうけん）を持った兵隊さんが見回っていました。

ご自宅のお仏壇のまえで話してくださった中村さん

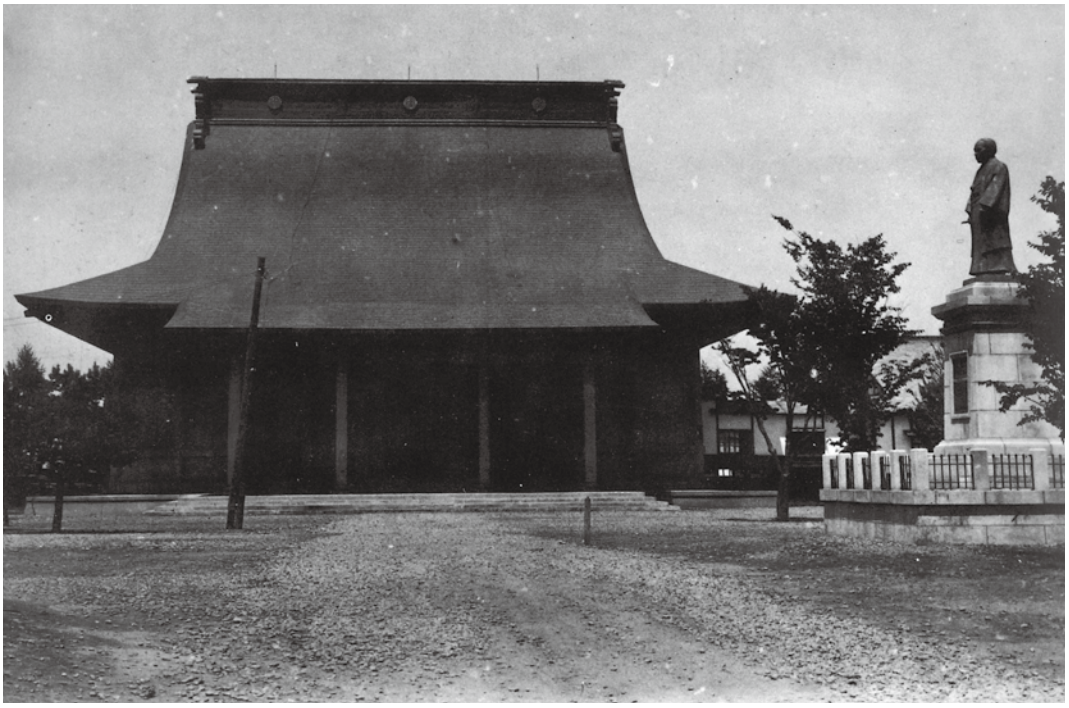
お風呂は夕方、日のある内に入ります。家の中では電灯に袋をかけて低い位置で灯して、暗くしていました。明かりや薪を燃やす煙が敵航空機に見つからないようにするためです。

米軍艦載機が北海道各地を空襲した昭和20年7月14日と15日。音更も両日空襲にあいました。15日、突然遠くから爆撃機の音が響いてきて、広尾から爆撃機が音更に向かってきたのが分かりました。恐ろしくて防空壕に飛び込みました。

今の人は戦争の真実を知りません。戦争が起きるのは、皆が仲良くしないからです。今は新型コロナによる非常時ですが、頭を使って考え、話しあえるのですから、もっと自国のために、そして他国のことも考えて、助け合っていかなければなりません。戦争の悲しみを繰り返さないために。

特集

非戦平和



写真①
昭和５年に新築された本堂および別院建築委員長・藤本氏銅像
（棚瀬善一編『ふるさとの想い出写真集　明治大正昭和　帯広』国書刊行会）

写真②
昭和 10 年に郷氏の寄進で建てられた鐘楼堂
（『本派本願寺帯広別院　帯広別院史』）

帯広別院の写真が語る 戦争の痕跡

明治40年に本派本願寺帯広別院として認可された当寺は、昭和5年、ついに悲願の本堂を完成させることになりました。

上の写真①は、境内が順次整備されていった頃の1枚です。本堂右側には、別院建築委員長としてその責任を双肩に担った藤本長蔵氏の銅像が見えます。昭和9年、晴れやかに建立除幕式が行われた銅像でしたが、戦時中の金属類回収令により供出されました（現在は藤本氏の功績を伝える石碑が建っています）。

また、写真②は、昭和10年に総代郷清吉氏の特別寄進により建立された鐘楼堂です。この梵鐘もやはり供出されました。

金属類回収令は、昭和16年8月、軍需生産の原料不足を補うために制定された勅令です。戦局が深まるにつれて、一般家庭から金属製の生活必需品がなくなるほど徹底的な供出が強制的に行われました。しかしこれは、戦争の一端でしかありません。

『仏説無量寿経』に説かれた「兵我（ひょうが）無用（むよう）」、非戦平和の願いのもと、二度と悲惨な戦争を起こさないために、歴史の証言を語り伝えていかなければなりません。

堀（ほり） 勝（まさる）さん

戦争だけは、どんなことがあっても決してするべきではない

大正15年7月音更町長流枝に生まれた堀勝さんは今年96歳になります。「完全なる軍国主義のもと、おかしいと思ってもそれを口にすることは決してできなかった。戦争だけは、どんなことがあっても決してするべきでない」ときっぱりと言う堀さんに、戦争の体験についてうかがいました。

戦争の苦しみを語ってくださった堀さん

葭原小学校、東士幌尋常高等小学校、そして青年学校を卒業した堀さんは、「学校を出ても兵隊にならないのは非国民」という風潮の中、昭和18年、18歳になる年に海軍の飛行機整備兵に志願しました。7月、福島県の郡山海軍航空隊に入隊し、新兵教育を受け、飛行機の整備術を学びました。

昭和20年、戦況は悪化の一途をたどり、本土の各都市が焦土と化していました。4月、堀さんが配属されたのは北海道・千島方面の防空を担う海軍航空隊大湊（おおみなと）派遣隊。道内の厚岸派遣隊での陸上勤務を命じられました。これが海上勤務だったなら、船はほとんど沈没しているので、「今思えば命拾いした」と言われます。

堀さんご自身が着用された海軍水兵帽

当時は組織的な戦死前提の特別攻撃が行われていました。堀さんが今も忘れられないのは、誰もが飛行不能と思う濃霧の中、司令官の発した「飛ばせ」の一言でした。

ひどい霧の中を離陸した水上戦闘偵察機は、釧路の昆布森付近の沖に不時着し、両翼に積んだ60キロ爆弾の片方が爆発。堀さんも捜索隊として、荒れる夜の海を現場に向かいます。「甲板で見たあの海の暗さは忘れられない。もう帰れないと思った」。

終戦後も苦しい生活が続きました。「働ける人はみな戦争に行ったから、国内はどうなるか。食料も物資も作れない。戦後は今では考えられない程、着る物も食べる物もなくなった。戦争で苦しむのは兵隊だけじゃない」と、戦争のもたらす本当の苦しみの数々を語ってくださいました。

それとは反対に、「今ははとても幸せです」と何度も言われます。つらい戦中・戦後を生きぬき、平和の大切さをかみしめておられます。お寺参りをこよなく大事にされた父・西川清七さんの教えを引き継いだ堀さん。かわいい孫やひ孫とともに穏やかに過ごせることに感謝し、お念仏を喜び、その喜びを次世代に伝える日暮らしを送られています。

2023（令和5）年8月号掲載

特集 非戦平和 シベリア墓参

第二次大戦の終戦直後、当時のソ連は日本人の捕虜や民間人をシベリアやモンゴルに強制連行し、抑留。飢えと寒さの中を苛酷な労働に従事させました。

抑留は長期にわたり、日本政府による帰還事業は昭和21年末から31年までかかりました。

帰還者からの聴き取り調査等で、抑留されたのは57万5千人、その内5万5千人の方がかの地で亡くなったと推計されましたが、埋葬地などは不確実でした。

ソ連から確かな情報が出だしたのは平成3年。約3万7千名の抑留死亡者名簿が提示されました。しかし、戦後すでに46年がすぎていました。

今年6月までに、抑留中に亡くなった計約5万1千名の身元が特定されました。しかし、悲しみが止むことはありません。

武力の行使が止まない現在、先人の思いを受けとめ、語り続けてまいります。（編集部）

お話 下村麗子（しもむられいこ）さん

出征をひかえた父・太吉さん

父の埋葬地にやっとたどり着いた長吉さん麗子さん夫妻

夫の父・下村太吉（たきち）は第二次世界大戦中の昭和18年4月6日、北千島第3地区部隊に招集されました。夫・長吉（ちょうきち）が小学校に入学した年です。ランドセル姿を5日ほど見ての出征だったと聞いています。その後日本は敗戦。太吉は極寒のロシア領東シベリアに抑留され、昭和21年8月28日、わが家に母、妻、子どもを待たせたまま、二度と祖国の土を踏むことなく「病名、赤痢」として病死しました。

昭和50年。北海道第1回シベリア墓参団5名の一員に夫の母が選ばれ、ハバロフスクへ向かいました。米ソ冷戦の時代、見張りは厳しく、決められた行程の墓参しか許されなかったため、父の墓には参れませんでした。

時は流れ、ソ連が崩壊。夫は「母の無念を晴らすチャンスがきた」と言いました。父の眠るムリー地区コサクランボへ行ける墓参計画を知り、夫と私二人は行く決心をしたのです。

夫婦でロシアへ

平成6年6月6日、新潟空港に集まった参加者は27名。結団式、様々な書類を渡され、午後には機上の身となりました。日本海上を北上し2時間も過ぎると、シベリアの大地が見えはじめました。飛行機は高度を下げ、アムール川が大きく蛇行する姿が見えて、日本にはない広大な土地に驚かされました。

間もなく私たちはロシアに第一歩を踏み出しました。ハバロフスクの殺風景な飛行場には、故障した飛行機がテントを被せられ、古びた自動車が多数並んでいます。迎えのバスはエンジンもファンベルトも丸見え。宿泊は眼科専門病院でした。

6月7日、民間団体の平和委員会事務所を訪ね、シベリアの歴史、お墓の場所について説明を受けました。

その後、街はずれにある公園の

ハバロフスク郊外の公園にある日本人墓地。ロシアで初の墓参をした

日本人墓地に。そこには310名が眠っています。皆でローソクを灯して、お花、お酒、タバコなどを供え、故人を偲んで合掌、読経しました。ロシアで初めての墓参ができました。

その日のうちに、夫の父が一人寂しく眠るムリー地区コサクランボへ行くため、夜行列車に乗り込みました。

列車を乗り継ぎ念願の地へ

6月8日朝7時、コムソムリスク駅に到着。駅にホームはなく、鎖ハシゴで下車。この駅で、東の終点ソフガワニ駅行き列車に乗り換えます。駅で私たちが次に世話になるコムソムリスク大学生のワロージャ青年を紹介されました。発車して間もなくワロージャは、コサクランボには大きなダニがいて刺されたら命に危険が及ぶと説明しました。しかしコサクランボ特別病院墓地に行かなければ、ここまで苦労して来た意味がありません。私たちは必死に頼みこみ、ワロージャはしぶしぶ承諾してくれました。

コサクランボ駅で鎖ハシゴを伝って下車。私たちは思わず仏さまに合掌しました。コサクランボは小さな集落ですが、当時は鉄道・道路の建設、丸太の切り出し等々の仕事のため、ソ連人労働者、日本人・ドイツ人の捕虜は多く、特別病院もあったため、相当な人口だったそうです。

現地案内人によると駅から1キロほど離れたところに墓地があるとのこと。しかし白樺林に道らしき道はなく、やっと暗い林を抜けると、雑木林の中に古びた墓標がありました。

48年をへて父の墓に参る

皆が墓標のそばに集まりました。見渡すと、土饅頭のような形のたくさんの土盛りがあります。皆それぞれに家族の写真を飾ったり、家から持ってきた思い出の品々を飾りました。私たちは夫の母、妹たちから預かった物を供え、ローソクに火を灯し、線香を焚きました。酷寒の地でろくに栄養もとれず亡くなった父に、私たちは家族をもって幸せに暮らせていること、隣近所にお世話になっていることなど、近況を報告しました。

駅までの帰り道、ムリー川の水を夫と飲みました。父も空腹のとき、暑いとき、寒いときも、故郷の我が家を思いながらこの水を飲んだかと思うと、涙が止まりませんでした。

列車を乗り継ぎ、白樺林の道なき道をぬけ
決死の思いでたどり着いた
コサクランボの墓地付近にて

本特集記事は下村麗子さんのご承諾を得て、平成29年にお亡くなりになった長吉さんの手記をもとに、麗子さんのお話を交えて再編集しました。

2024（令和6）年8月号掲載

特集 非戦平和

第二次大戦下の帯広別院

第10代輪番、高倉了要師

来年は終戦80年。本紙8月号に「非戦平和」を特集して5年となりました。戦争の経験を話してくださる方が年々少なくなり、戦争の反省を継承していくことの難しさを実感します。それでも私たちには、戦争で何が起こり、人々が何を経験したのかを正しく知ることが大切であり、二度と戦争はしないという強い決意にいたります。

それでは、戦時下、帯広別院はどんな状況にあったのでしょうか。『五十年史』『百年史』をひもとくと当時の状況が記されていました。

境内で国旗掲揚する戦中の写真（『百年史』より）

帯広別院第10代輪番、高倉了要（たかくらりょうよう）師の頃のこと。高倉師着任から2週間後の昭和16年12月8日、真珠湾攻撃によって太平洋戦争が開戦、戦局は帯広の街にも深刻な影を落とします。昭和19年4月には陸軍第一飛行師団（鏑部隊）が札幌から移駐して来て、市街地に司令部を置きました。旭川の第七師団（熊部隊）も移駐して来て帯広は軍都と化し、主だった施設は軍に徴用されました。帯広別院も軍の宿舎として接収されました。

高倉輪番のこんなエピソードが記されていました。出征兵士宅に輪番がお参りした時のこと。出征する若い息子さんに「お父さんと仲の良い僧の独り言だと思って聞いてください」と前置きし、当時の社会ではあるまじき発言をしたそうです。「どうか将官に仕官しないこと。塹壕から突撃の命令を下す地位にはならないこと。部下も敵も命があり家族があり、死んだらみんな悲しむでしょう。（中略）戦争に正義はありません。そのうち満州に行くかもしれませんが、その時は現地の人に優しい気持ちで接してください」。

国家総動員法、宗教団体法が公布され、国家総力戦遂行のために仏教各宗派も本願寺派も戦争協力を行った時代でした。僧侶も戦争に反対できず、命の大切さすら語れなかった歴史の事実から目をそらしてはなりません。

帯広別院本堂建築の功労者、藤本（ふじもと）長蔵（ちょうぞう）さんの葬儀についても記されていました。戦争の激しくなっていた昭和20年2月24日、長蔵さんは73歳で往生されました。本業の百貨店新築移転の際には「別院本堂の棟より百貨店が高くては申し訳ない」として、百貨店を三尺低くされた方です。

別院は軍の宿舎として接収されていたので、葬儀の会場もありません。たまたま演習のため部隊が不在となった時間に、別院本堂で葬儀をすることができたそうです。

ご法話

兵戈無用

文：桐林一紀

本紙では毎年8月号にて、帯広・十勝における戦時中のお話をご門徒の皆さんからうかがってまいりました。――戦争により家族と離れ離れになり、二度と会うことがなかった。青春時代はすべて戦争だった。戦後何年たっても、現代にいたるまでお骨の返還を待っておられる話など、悲しみはつきません。戦争による心の傷を抱えたままの方が決して少なくないことを知りました。時には思い出したくないことや語りたくないこともあったかと思いますが、それでもご協力いただいたことに感謝申しあげます。

お釈迦さまの説かれた『仏説無量寿経』には「兵戈無用（ひょうがむよう）」という言葉が出てきます。武力も武器も用いる必要が無いという意味の言葉です。この言葉が出てくる一節には、

「仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれないところはない。そのため世の中は平和に治まり、太陽も月も明るく輝き、風もほどよく吹き、雨もよい時に降り、災害や疫病（えきびょう）などもおこらず、国は豊かになり、民衆は平穏に暮し、武器をとって争うこともなくなる。人々は徳を尊び、思いやりの心を持ち、あつく礼儀を重んじ、互いに譲（ゆず）りあうのである」

と説かれています。

自己中心的な考えをあらため、同じ「いのち」を生きている他の人たちを認めること。自分が正しいと他を批判し排除することには、決して安らぎはありません。私たち一人ひとりが仏さまの願いに耳を傾け、自分の言葉や行いを見つめることが必要だとあらためて気づかされます。

戦争は決して過去のことではありません。世界では今もなお、多くの戦争や紛争が生じ、「いのち」の尊厳をふみにじる事態が行われています。

帯広別院ではこれからもいのちの尊厳の大切さを伝える取り組みをしてまいります。9月18日午後1時20分から帯広別院鐘楼堂にて平和の鐘をつきます。どなたでも参加いただけますので皆さまの参加をお待ちしております。また9月中は本堂で非戦平和パネル展を行います。別院にぜひお参りください。

永代経懇志ご進納

（ご進納日　6月15日～7月14日）

仏教暁天講座
東西別院に早朝からお念仏ひびく

今年で58回目の開催を迎えた夏の恒例行事、西別院・東別院共催による仏教暁天講座が開催されました。

西別院では7月13日（日）～15日（火）、山陰教区神門組の榊原慎師に「今ここで遇う」をテーマに、親鸞聖人がどのようにして阿弥陀さまに出遇われたかを『歎異抄』からお話しいただきました。表情豊かなご法話を、多くの方が聴聞されました。

お晨朝は6時、引き続いての講座。夏真っ盛りの早朝、静かで清涼な寺院に集い、なにかとお忙しい方も〝法話を聞いてから出勤しませんか〟との願いをもって、東西別院にて毎年開催しています。

親しみやすくご法話くださった講師の榊原師

盆踊り練習会が大盛況
いざ8月3日14時本番へ！

7月6日（日）午後2時から第50回西別院・電信通ぼんおどりにむけた全体練習会を行いました。ご門徒・近隣住民20名ほどが参加され、メインの練習は本願寺音頭。以前は多くの方が踊れたのに、コロナ等により10年近く途絶えていました。参加者は10分ほどで振付を覚え、曲に合わせて繰り返し練習されました。本番は多くの参加者が見込まれます。踊り手みんなで、ますます盛り上がっていきましょう。

お知らせ

帯広別院・十勝組合同 戦後八〇年 戦争犠牲者追悼法要
～非戦・平和を願うつどい～

10月23日（木）別院本堂にて本法要を左記のように修行します。

午後1時　追悼法要
午後2時　記念講演

▪講師　帯広柏葉高校歴史教諭
　蓑口一哲（みのぐちかずのり）さん

▪語り部　帯広空襲を語る会発起人
　空襲体験者の吉澤澄子さん

蓑口さんは帯広市在住で、戦地取材や、戦争体験者の掘り起こし取材、民族紛争ルポを行い、授業や講演活動、出版、ドキュメンタリー番組製作協力などをされています。

帯広空襲を語る会は、吉澤さんと被災家族により始まり、空襲や戦時中の証言を集め、平和の尊さと戦争の現実を伝えてこられました。

平和を願う集いにご参拝ください。

予告

帯広別院パークゴルフ大会
参加者大募集!!

お待たせしました。毎年ご好評のパークゴルフ大会の予定が決まりましたのでご案内します。

◉9月12日（金）
受付：午前9時　開始：9時30分
表彰式：午前11時30分　本堂にて
懇親会：12時頃　境内にて

◉集合・会場
十勝川公園パークゴルフ場（東3条2丁目先　柏葉高校様北側）

◉対象者：別院門徒・そのご家族

◉参加費：一人1，000円
（当日受付にてお支払いください）

◉申込・問合せ
帯広別院壮年会（担当：津村・池上）

そうだったのか?!

浄土真宗

仏壇にお水を供える？供えない？

ご門徒さん宅にお参りして、故人の使っていた湯飲みやコップにお水を入れ、お仏壇に供えてあるのを見かけたことがあります。「仏さんもご先祖さんも、喉が渇くだろう」など、追善の気持ちからでしょうか。故人を思う気持ちは尊いのですが、往生されたお浄土には「八功徳水（はっくどくすい）」という大変よい水があるので、お水を供える必要はないのです。また浄土真宗は、亡くなった方のための追善供養はしない教えです。

ではお仏壇にお水はいらないのでしょうか。いいえ、そうではありません。阿弥陀さまの前（上卓（うわじょく））には華瓶（けびょう）という仏具が一対あり、お水を入れ、樒（しきみ）などの青木を生けます。樒の葉や茎には精油が含まれるので、独特の香りがうつった華瓶の水を、清らかな香水（こうずい）としてお供えします。

上卓の左右一対にかざられた華瓶。しきみが生けられている

なお、樒は有毒で花や実は特に危険なため、誤食にはお気をつけください。

また、お仏壇にはお茶やコーヒー、ビール、タバコなどはお供えしません。

8月 オススメの一冊

『自分に嫌われない生き方』

谷口たかひさ著
KADOKAWA刊
四六判／320頁
税込1760円

この本のことはSNSで知りました。多くの人がおすすめし、「作者の生き方に共感した」「私の価値観をガラッと変えてくれた」「しっくりくる」などなどコメントに溢れて大反響だったので読んでみたくなりました。

この本には、著者の谷口さんが世界約100か国を巡る中で出会った多くの人々からかけられた言葉や感じたこと、体験を通して得たものが、飾りのない言葉に乗せて素直に書かれており、自分を好きでいられる人生の送り方、心豊かに生きるための思いが存分に記されています。そして、これから先の遠い未来を生きるのではなく、過去を振り返り引きずって生きるのでもなく、〝今日！　たった今！〟を精一杯生きることを大切にしていて、どこか仏教の思いに通じるところを感じます。人は出会った人たちのあたたかさにふれ、支えられて生きていることを知り、私のこの命がかけがえのないものだと気づかせてもらえるような一冊です。（池上）

たくさんの想い出に感謝を込めて
株式会社ベルコ
シティホール ベルコ会館
〒080-0014 帯広市西4条南27丁目1 ☎0155-21-4444
生花のご注文は ベルコまで ご用命下さい。
年中無休 24時間体制
ベルコ セレモニーホール 帯広市西4条南27丁目1番地 ☎0155-21-4444
ベルコ西 シティホール 帯広市西21条南1丁目15番地 ☎0155-36-4444
ベルコ音更 シティホール 音更町木野大通東13丁目3番地 ☎0155-31-9999
ユアホール帯広東（家族葬専用式場） 帯広市東11条南17丁目4番地 ☎0155-27-4444

お知らせ

戦後80年 平和の鐘

今年で終戦から80年。別院では9月に「非戦平和パネル展」を開催します。9月18日には、本山修行の「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」（於東京）に合わせ全国の寺院等と同時に、別院でも「平和の鐘」をつきます。十方に響く平和の鐘をともに撞きに、別院にお参りください。

■非戦平和パネル展　9月1日～30日　本堂にて

■平和の鐘　9月18日（木）13時20分　鐘楼堂にて

お知らせ

公開講座　桂春蝶さん出演
落語「鏡の中の親鸞～歎異抄より～」

今年の公開講座は落語です。独演会はいつも完売の桂春蝶さんによる本作は原作『歎異抄』、監修は釋徹宗師（本派）。落語には親鸞聖人、お弟子の唯円ほかが登場し、「善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや」の世界がくり広げられます。他力とは？　念仏とは？　笑って泣いて、楽しみましょう。入場無料。

■9月27日(土)13時30分開場　14時開演　本堂にて

■定員　360名（自由席）　先着順の事前申込制。

公式LINE、別院窓口、電話にてお申込ください。

自他ともにたいせつな言葉紹介　人我兼利（じんがけんり）

袖触り合うも他生の縁

「他生ではなく、多少では？」とお感じになる方もいらっしゃるかと思います。◆これまでの人生において、様々な出会いのご縁をいただいてこられたと思います。人との出会いのみならず、ペットとの出会いや様々な思い出の他、環境や社会情勢など時代の変化との出会いもあったことかと思います。◆お釈迦さまの教えに「輪廻」という思想があります。そのお心におきましては、私たちの命を「過去世・現在世・未来世」の三世を通し連綿と続く「他とのご縁」と味わいます。◆私の命が他生の因縁により関わりあっていると気づかされるとき、独りよがりの心を離れ、「お互い様」と味わうことができます。そしてその「お互いの命」を、同じく悟りをいただく身、仏として誓われた命として「心豊かに生きる命」と味わわせていただくところに、南無阿弥陀仏のおこころをいただきます。（石川）

大切な人を大切に送りたい
葬儀社 帯広公益社
0120 FreeDial 0120-24-1087　帯広公益社　検索
公益社メモリアルホール・別邸　西23条南1丁目
公益社メモリアルホール札内・別邸　札内共栄町3番地3
公益社中央斎場　西12条南29丁目
公益社市民斎場　西10条南4丁目